

はぐくむ

18歳選挙権

生徒も「有権者」教育の転換期

今年「18歳選挙権元年」。高校という枠組みの中に教職員以外の有権者が生まれるということは、学校教育における大転換になります。ただ、女性の参政権が認められた過去の選挙権拡大時などに比べると盛り上がりがいまいちで、議論も習熟していない印象があります。

正月明け、毎年交流している韓国私立高校から中高生二十数人が自由の森学園にやってきました。韓国では高校卒業後の満19歳で選挙権が与えられます。自分の国の政治、自身の政治参加をどう見ているか、高校生に尋ねてみました。

ある男子生徒（1年）は「政治家は自分の利益のために活動しているように見える。能力ではなく人脈で選んでいる国民も問題だ」と指摘。女子生徒（同）か

らは「日本軍慰安婦に関する大統領の妥協に反発を感じる。政治家は主張を一貫させるべき」との意見も出ました。

日本の高校生はどうでしょう。「憲法が変わる方向に進んでいることが問題」「軍事的な方向に進んでいるように感じる」。現状への危機感を募らせた意見がたくさん出ました。ある女子生徒（2年）は「戦争を体験した世代がいなくなるから不安だ」と言います。

政治を考える上で一番自分に影響があると思うメディアについても聞いてみました。日本人の生徒は「国会中継は昼間にやっているのだから見られない」と指摘。確かに、議会を夕方や休日に行うことも考えるべきかもしれません。

一方、韓国人の生徒は学校にいる時間

が長く、テレビはほとんど見ないそうです。「いろいろな主張を見ながら判断する時間が与えられるのは、大学に入ってから」。そう話した韓国人の女子生徒は、高校生に選挙権を与えるのは早いと考えています。過熱した受験体制の中で、自分の利益だけでなく社会の将来を見据えて選挙権を行使するのは、難しいのかもしれない。

高校生は勉強だけしていればよい。こうした考え方に対し、「18歳選挙権」は大人と子ども、教える・教えられるという関係から、共に社会について考え形成していく関係が変わっていく契機です。ただ、政治的な知識や主権者としての教育は重要ですが、生活者、市民としての感覚を身につけることを見落としはいいけないと思います。今年、高校教育はどのように変わるのでしょうか。

（自由の森学園理事長 鬼沢真之）